



〈山形市出身〉

## 長岡 弘樹さん

作家

## PROFILE

1969年、山形市生まれ。財団法人職員を経て、2003年『真夏の車輪』で第25回小説推理新人賞を受賞。08年『傍聞き』で第61回日本推理作家協会賞(短編部門)を受賞。著書に『教場』シリーズ、『緋色の残響』『巨鳥の影』『殺人者の白い檻』などがある。山形市在住。

## COMMENT

不思議と見飽きない、  
いつも見る風景にこそ魅力が刻まれている

## 居心地の良さ

## 山形ぐらいがちょうどいい

山形で生まれ育ちました。子どもの頃は、仙台などに比べれば田舎であることに不満を持っていたように記憶しています。進学にあたって他県の大学を選んだのも、山形を出たい気持ちが強かったからでしょう。結局、在学中に作家を目指すようになり、そのためには実家で暮らした方が都合だという打算から故郷に戻ってきましたが。

世の中全体が便利になった今では、山形ぐらいの土地が最も居心地のいい場所なのではないかと思います。

## 勤勉な県民性が

## 何よりの財産

勤勉で尊敬できる人が多いように感じ

ています。例えば、米や果物をはじめとした農作物が何でも美味しいのは、農家の方々が地道に研鑽を重ねてきた結果でしょう。この県民性は何よりも大きな財産だと思います。

また、災害が少ない点もありがたいです。信憑性のほどは分かりませんが、奥羽山脈下の地盤が固いおかげ、といった話をよく耳にします。そのせいか、何かに守られているような、とても安心感のある土地という印象を強く持っています。

## 自然の風景に刻み込まれた

## 山形の素晴らしさ

仕事中、ふと手を休めたとき、窓から見える蔵王連峰の佇まいに意識を奪われてしまい、そのままぼんやりしてしまう

ことが珍しくありません。幼少時から幾度となく目にしているはずなのに、不思議と見飽きない。そんな豊かな自然の風景にこそ、山形の素晴らしさが最も強く刻み込まれていると感じます。

その自然が生み出す食べ物の美味しさにも、山形愛を深く覚えています。一昨年秋、某社からの誘いで米沢牛のすき焼きを心行くまで食べる機会に恵まれました。寒暖差の激しい置賜盆地ならではの環境があって初めて、きめ細やかで人肌でも脂が溶け出すような霜降りのロース肉を作り出すことができると思います。そのような話を聞くにつけ、風景のいい場所は人間の目だけでなく舌も幸せにしてくれるのだな、と思わずにはいられません。

## MESSAGE

生まれ育った場所にずっと住んでいると、何もかもが普通になってしまい、地域のよさを実感できなくなるおそれがあります。ですから、一度ぐらいいは外から故郷を見る機会を設けてはいかがでしょうか。

あるいは離れた土地で山形ゆかりの何かに触れる、というのもいいでしょう。私が高知にいたとき、親が高知のさくらんぼを送って寄越してくれました。それを友人に食べさせ、味を絶賛されたとき、我がことのように誇らしく思い、山形に生まれてよかったとしみじみ感じたものです。